

教育研究等活動業績

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
ツキダテ ナオタ 桐館 尚武		男	非公表	准教授	人間文化学部人間文化学科 人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号		博士(教育学)	専門分野	教育心理学・教育学・特別支援教育	
学 歴	2000年	4月 国際基督教大学教養学部教育学科入学			
	2004年	3月 国際基督教大学教養学部教育学科卒業(教養学士)			
	2004年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程入学			
	2006年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程修了(教育学修士)			
	2006年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程入学			
	2012年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(教育学博士)			
実 務 経 験	2006年	4月 国際基督教大学教育研究所助手 (2014年3月まで)			
	2010年	4月 日本社会事業大学 通信教育科 社会福祉主事養成課程(心理学) (現在に至る)			
	2012年	4月 明星大学 非常勤講師(教育心理学Ⅰ・Ⅱ) (2019年3月まで)			
	2013年	4月 明星大学 非常勤講師(心理学調査法・心理統計学Ⅰ・Ⅱ) (2014年3月まで)			
	2013年	4月 東京農業大学 非常勤講師(カウンセリング論) (2020年3月まで)			
	2013年	4月 東京農業大学 非常勤講師(心理学概論) (現在に至る)			
	2013年	4月 山梨英和大学 非常勤講師(データ分析演習・心理学実験)(2014年3月まで)			
	2014年	4月 山梨英和大学・人間文化学部人間文化学科・専任講師 (2019年3月まで) 山梨英和大学大学院・人間文化研究科・専任講師(兼任)			
	2015年	6月 山梨大学(幸福福祉概論*オムニバス講義)(2018年6月まで)			
	2017年	9月 山梨県立大学(教育心理学) (現在に至る)			
	2018年	8月 聖学院大学(学習・言語心理学*夏季集中) (現在に至る)			
	2019年	4月 山梨英和大学・人間文化学部人間文化学科・准教授 山梨英和大学大学院・人間文化研究科・准教授(兼任)			
受 賞 歴	年	月 特になし			
	年	月			
所 属 学 会	2013年	4月 日本コミュニケーション障害学会			
	2013年	3月 日本行動計量学会			
	2013年	3月 Sign Language Linguistics Society			
	2009年	4月 日本認知心理学会			
	2009年	4月 日本教育心理学会			
	2008年	4月 日本環境心理学会			
	2008年	4月 日本応用心理学会			
	2006年	4月 日本感情心理学会			
特 許 免 格 許 ・ e-mail	2020年	7月 UCLA PEERS® Certified Provider (Adolescents)			
	年	月			
e-mail	非公表				

目 次

○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

○添付資料

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>知識を一方向的に与えるのではなく、最終的には学生が自ら主体的に学ぶことができるように、学生の思考力と自信を育むことを目標としている。必ずしも回答が1つに絞れないような、学生が試行錯誤できる課題を提示することを心がけ、学生には、時として答えに至る最短の道ではないとしても、グループワークやディスカッション等、他者との関わりの中で、付随するさまざまなものを学んでほしいと考えている。勉強面だけに留まらない全般的な人間教育への貢献を目指している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. グループワーク、ディスカッションを取り入れた講義経験</p> <p>5-8名から成る学生グループを対象に研究計画の立案からデータ収集の実施・分析、論文の作成、研究発表(口頭・ポスター)までの一連の指導を各研究法で実践する演習型講義を行ってきた。国内学会発表、卒業研究に十分対応できる力を養っている。</p> <p>b. 達成目標を意識させた講義</p> <p>授業の最初に大きな設問を与え、講義を通してその設問への答えを得るという形式で講義を行っている。学生が漫然と授業を聞くことを減らし、授業内容を自身の問題に引きつけて考えるきっかけとしている。</p> <p>c. 情報保障を前提とした講義経験</p> <p>聴覚障害者大学教育支援プロジェクトにおいて高校生の難聴者・聾者対象に、情報保障を前提にした講義を行っている。パワーポイントの利用や指示語の配慮など速記者の負担を減らす工夫や難聴者・聾者のために提案された日本福祉工学会マニュアルに準拠した講義経験がある。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	<p>2022年度:</p> <p>教育心理学, 心理学概論Ⅰ, 感情・人格心理学Ⅰ, 学習・言語心理学Ⅰ, 学習・言語心理学Ⅱ, 心理学実験Ⅰ・Ⅱ, 心理学統計法Ⅰ・Ⅱ, 心理学データ分析演習Ⅰ・Ⅱ, 心理学統計法特論, 基礎ゼミナール, 展開ゼミナール, 専門ゼミナール, 卒業研究, 修士論文</p>
代表的シラバス	<p>「教育心理学」</p> <p>教育心理学とは、教育現象を心理学的に研究する実証科学であり、主に学習、評価、発達、社会の4領域から成り立っています。この4領域に沿って、教育心理学の発展に寄与した代表的な心理学者たちを取り上げながら、人(学習者)の個人差と適切な学習への援助について、その方法、基本的な概念や理論、具体的な技術に関して学びます。</p>
教育改善活動	<p>日本社会事業大学GP 大学教育・学生支援推進事業[テーマA]大学教育教育プログラム外部委員(2009年~2011年):外部委員として、ソーシャルワーク・コミュニケーション検定、e-ポートフォリオの検討を行った。最終年、2011年には公開シンポジウムのパネリストとして他分野の専門家の方々とともに最終結果の検討を行った。</p>
対教す育る能力評価に	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>FDからは苦勞をするが得るものが多いという主旨のコメントが目立ち、自身の教育目標はある程度達成できていると感じている。一方で、授業についていけない学生が確実に存在すること、また学生の過度の負担を減らすためにも、配信型の予習教材の作成が今後の課題である。</p>
対教す育る能力評価に	<p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>本学では教員による相互評価のシステムはないため、その評価を得ることが出来ていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>Pedagogical Agentsと総称されるキャラクター教材を題材とした応用研究や、絵や図といった視覚刺激と音やナレーションといった聴覚刺激の組み合わせから効果的なメディア教材の設計原理を提案する基礎研究を行っている。また、コミュニケーション障害の検査の作成といった学際的な共同研究に従事している。現在は、特に機械学習の手法を用いて語用の側面から自閉スペクトラム症(ASD)を説明する試みに関心をもっている。</p>
研究経歴	<p>2006年 国際基督教大学博士後期課程在籍時、同大学教育研究所研究員として認知負荷理論に基づくマルチメディア教材の効果測定の研究に従事(現在に至る)</p> <p>2009年 社会事業大学 斎藤研究室(2022年度より東京大学)と手話理解ならびに聴覚障害児に関連する各種共同研究に従事(現在に至る)</p> <p>2012年 共立女子大学 権藤研究室とASD児の言語発達の研究およびCCC-2の評定者間一致率の研究に従事(2017年3月まで)</p> <p>2012年 東京学芸大学 松井研究室とアイトラッキングを利用したASD児のプロソディに基づく感情理解の研究に従事(2020年3月まで)</p> <p>2012年 金沢大学 大井研究室と語用障害児のためのチェックリストの作成とその利用に関する研究に従事(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>大井学・藤野博・<u>槻館尚武</u>・神尾陽子・権藤桂子・松井智子(2016). 子どものコミュニケーションチェックリスト第2版(CCC-2)日本語版 日本文化科学社</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>水谷柳子・<u>槻館尚武</u>・田中早苗・吉村優子・菊知充・長谷川千秋・大井学(2021). 子どもの語用能力評価法の開発(第2報): ことばのつかいかたテストの判別性能および語用能力の認知能力との関連の検討 コミュニケーション障害学, 38, 183-193.</p> <p>水谷柳子・<u>槻館尚武</u>・田中早苗・吉村優子・菊知充・長谷川千秋・大井学(2021). 子どもの語用能力評価法の開発: ことばのつかいかたテストの信頼性・妥当性の検証 コミュニケーション障害学, 38, 173-182.</p> <p><u>槻館尚武</u>(2020). 検査性能に関わる諸概念 コミュニケーション障害学, 37, 117-121.</p> <p><u>槻館尚武</u>(2020). 研究と実践をつなぐ検査: 座談会に代えて コミュニケーション障害学, 37, 152-154.</p> <p>T. Yamada, Y. Miura, M. Oi, N. Akatsuka, K. Tanaka, <u>N. Tsukidate</u>, T. Yamamoto, H. Okuno, M. Nakanishi, M. Taniike, I. Mohri, & E. A. Laugeson. (2020). Examining the Treatment Efficacy of PEERS in Japan: Improving Social Skills Among Adolescents with Autism Spectrum Disorder. Journal of Autism and Developmental Disorder, 50, 976-997.</p> <p><u>槻館尚武</u>(2019). ベダゴジカルエージェント研究についての一考察. 山梨英和大学紀要, 17, 65-73.</p> <p>K. Hanabusa, M. Oi, <u>N. Tsukidate</u>, Y. Yoshimura (2018). Association between maternal Autism Spectrum Quotient scores and the tendency to see pragmatic impairments as a problem, 13(12): e02909412</p> <p>M. Oi, H. Fujino, N. N. <u>Tsukidate</u>, et al., (2017). Quantitative communicative impairments ascertained in a large national survey of Japanese children. Journal of Autism and Developmental Disorder, 47, 3040-3048.</p>

研究実績	<p>梶館尚武・大井学・榎藤桂子・松井智子・神尾陽子(2015).Children's Communication Checklist-2 日本語版の標準化の試み:標準化得点の検討 コミュニケーション障害学, 32, 99-108.</p> <p>綾野鈴子・榎藤桂子・梶館尚武・大井学・田中早苗(2014).Children's Communication Checklist-2(日本語版)による幼児コミュニケーション評価—養育者と保育者の比較— コミュニケーション障害学, 31, 140-149.</p> <p>田坂麻紘・小松由樹子・武井友希・梶館尚武(2011). 青年期の愛着スタイルからみた恋愛におけるロマンチック希求度の検討—ロマンチック希求尺度の作成を通して. 教育研究, 53, 101-111.</p> <p>N. Tsukidate. (2010). The Effects on the Human-Agent Interaction of Users' Imagination of Sensations Experienced by the Animated On-Screen Agent. Educational Studies, 52, 89-96.</p> <p>J. C. Maher, N. Tsukidate., F. Takishita., & A. Sugiyama. (2007). Place-Name Study in Multicultural Education in Japan : Ainu place-names in the Kanto Region. Educational Studies, 49, 99-106.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. 国際会議発表</p> <p>Oi, M., Mizutani, R., Ikeda, T., <u>Tsukidate, N.</u>, Tanaka, S., Hasegawa, C., Yoshimura, Y., Hiratani, M., Fukuda, J., & Kikuchi, M. The development of pragmatic ability from early childhood to adulthood in individuals with and without autism spectrum disorder. 13th Autism-Europe International Congress, Cracow, Poland. October 7-9, 2022.</p> <p>H. Shimauchi, <u>N. Tsukidate</u>, K. Hishiyama, M. Oi, Y. Yoshimura, M. Kikuchi and C. Hasegawa, Discovering Knowledge of ASD from CCC-2: Ensemble Learning Approach for Analysis of ASD, ACM ICPS ICISS'20, 128-132, Cambridge, UK. March 19-22, 2020.</p> <p>T. Matsui, <u>N. Tsukidate</u>, & H. Fujino, Recognition of Emotion from Lexical Meaning and Tone of Voice. The 2019 Society for Research in Child Development (SRCD), Biennial Meeting, Baltimore, Maryland, USA, March 21-23, 2019.</p> <p>M. Oi, H. Fujino N, & <u>N. Tsukidate</u>, Quantitative Communicative Impairments Ascertained in a Large National Survey of Japanese Children, XI Autism-Europe International Congress, Edinburgh, UK, September, 2016.</p> <p>K. Gondo, T. Matsui, R. Kojima, & <u>N. Tsukidate</u>, Longitudinal Study on Expressive Vocabulary Acquisition among Japanese Children with ASD. 15th International Clinical Phonetics & Linguistics Association 2014, Stockholm, Sweden, June, 2014.</p> <p>K. Saito & <u>N. Tsukidate</u>, Eye Gaze and Eye Movement in Japanese Sign Language. Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR) Conference 11, London, UK, July, 2013.</p> <p>N. Tsukidate, Consideration of the redundancy principle in foreign language narration. The 4th International Conference on Cognitive Load Theory 2010, Shanghai & Macao, November, 2010.</p> <p>N. Tsukidate & Y. Morishima, The effect of an embodied agent's performance on self-efficacy in human-agent interaction. The 3rd IET International Conference on Intelligent Environment, Ulm, Germany, October, 2007.</p> <p>2. 招待講演</p> <p>電気情報通信学会 コミュニケーションクオリティ研究会 特別招待講演 梶館尚武 コミュニケーションと自閉スペクトラム症 ～CCC-2によるASDスクリーニングの試み～ オンライン開催 2020年6月25日</p> <p>3. 学術誌編集</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 協力編集委員(2021年10月～現在に至る)</p>
------	--

<p>研究実績</p>	<p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 編集委員(2015年10月～2021年9月)</p> <p>4. 学術査読</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2022年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2021年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2020年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2019年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2018年)</p> <p>言語科学会 国際年次大会 査読者(2017年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2017年)</p> <p>日本語用論学会 『語用論研究』 査読者(2016年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2016年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2015年)</p> <p>認知科学会 『認知科学』 査読者(2012年)</p> <p>日本人工知能フジ学会 『知能と情報20 ソーシャル・エージェント特集号』 査読者(2008年)</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>日本学術振興会(JSPS)令和4年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「オンラインで語用能力を評価する「ことばのつかいかたテスト」標準化と実施サイト構築」 分担研究者 2022年4月-現在に至る</p> <p>日本学術振興会(JSPS)令和2年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「視覚・聴覚等に障害をもつ人の英語能力の測定法の開発」 分担研究者 2020年4月-2023年3月まで</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成30年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)(特設分野研究)「手話のオンラインとアジアろうコミュニティでの社会貢献への応用」 分担研究者 2018年4月-2022年3月まで</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成27年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「語用論発達評価法の開発:障害種別を超えて」 分担研究者 2018年4月-2019年3月まで</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成29年度科学研究費補助金, 新学術領域「共創的コミュニケーションのための言語進化学」 B 03認知発達班(代表:小林春美)協力研究者(2018年より連携研究者から名称変更) 2017年9月-2022年3月まで</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成29年度科学研究費補助金, 基盤研究(C)「コミュニケーションのセテリング・スイッチ・マーキングとしてのゲイジングの研究」 分担研究者 2017年4月-2019年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成25年度科学研究費補助金, 挑戦的萌芽研究「言語的・パラ言語的・非言語的視線の記述システムの開発」 分担研究者 2013年4月-2016年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成25年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の標準化と日英語用障害などの比較」 分担研究者 2013年4月-2014年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成24年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「視覚・聴覚障害児の認知能力を利用した小学校英語バリアフリー教授法・教材の開発」 分担研究者 2012年4月-2017年3月</p> <p>みずほ福祉助成財団研究助成「聴覚障害者のスキルアップ・ステップアップのための書記日本語教育法およびマニュアル開発～エラーアナリシスを中心に」 共同研究者 2011年4月-2012年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成22年度科学研究費補助金, 挑戦的萌芽研究「視線の段階的言語化理論の構築」 分担研究者 2010年4月-2012年3月</p> <p>日本社会事業大学共同研究資金「脳科学を福祉教育に活かす～コミュニケーション能力を高める授業をめざして」 共同研究者 2009年4月-2011年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成20年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「手話・舞踊・演劇に見る言語性と非言語性の相互関係を利用した異文化理解教育」 分担研究者 2009年4月-2011年3月</p>

学会等発表・役員参加

2022年	11月	小林真理子・中嶋彩・榎館尚武・有泉風・本田秀夫 児童福祉領域における発達障害児支援サービスの整理－Ⅰ 公的支援サービスの基礎データ作成－ 第63回日本児童青年精神医学会総会 長野県松本文化会館・松本市総合体育館 2022年11月.
2022年	11月	中嶋彩・小林真理子・本田秀夫・榎館尚武・有泉風 児童福祉領域における発達障害児支援サービスの整理－Ⅱ 支援サービス機能の分類－ 第63回日本児童青年精神医学会総会 長野県松本文化会館・松本市総合体育館 2022年11月.
2022年	11月	中嶋彩・小林真理子・本田秀夫・榎館尚武・有泉風 児童福祉領域における発達障害児支援サービスの整理－Ⅲ 支援サービスマップ作成－ 第63回日本児童青年精神医学会総会 長野県松本文化会館・松本市総合体育館 2022年11月.
2021年	7月	水谷柳子・榎館尚武・田中早苗・吉村優子・菊池充・長谷川千秋・大井学 子どもの語用能力評価法「ことばのつかいかたテスト」の判別性能及び認知能力との関連の検討 第47回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター 2021年7月.
2020年	6月	榎館尚武 コミュニケーションと自閉スペクトラム症 信学技報, vol. 120, no. 76, CQ2020-8, pp. 43-46, 2020年6月.
2019年	6月	長塚円花・榎館尚武 スクールカウンセラーに対する相談の阻害要因に関する検討-不安に着目をして- 日本コミュニティ心理学会第22回大会 追手門学院大学
2018年	3月	榎館尚武・松井智子・藤野博・東條吉邦・計野浩一郎 標準語・方言による声かけがASD児の信頼に及ぼす影響 発達心理学会第29回大会 東北大学
2018年	3月	菱山完・榎館尚武・大井学・島内宏和 CCC-2を用いたSVMによるASD分類 電気情報通信学会2018年総合大会 学生ポスターセッション 東京電機大学
2017年	7月	自閉症スペクトラムセッション 口頭発表座長 第43回コミュニケーション障害学会愛知淑徳大学
2016年	1月	鈴木 聡・笹島 康明・小方 博之・榎館 尚武 教師役の身体化エージェントの外観と言葉遣いがユーザの学習に及ぼす影響:役割語に着目して 情報処理学会第166回ヒューマンコンピュータインタラクション研究発表会 関西学院大学
2015年	3月	榎館尚武 韻律を手がかりとした感情の同定: ASD児の特徴 ラウンドテーブル: 語用論発達の測定と評価 企画:大井学・藤野博 第26回発達心理学会 東京大学
2013年	7月	榎館尚武・大井学・権藤桂子 Children's Communication Checklist-2日本語版検査項目における内的整合性の検討 第39回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 上智大学
2013年	7月	綾野鈴子・権藤桂子・榎館尚武・大井学 CCC-2日本語版による幼児のコミュニケーションの養育者と保育者の評定者間比較 第39回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 上智大学
2011年	9月	榎館尚武 マルチメディア学習におけるナレーションと字幕の言語の組み合わせが保持・転移課題成績に及ぼす影響-外国語ナレーションにおける冗長性効果の検討- 日本教育工学会第27回大会 首都大学東京
2011年	3月	小松由樹子・武井友希・田坂麻紘・榎館尚武 青年期の愛着スタイルと恋愛へのロマンチック希求度の関係 日本発達心理学会第22回大会 東京学芸大学
2010年	10月	武井友希・田坂麻紘・小松由樹子・榎館尚武 恋愛におけるロマンチック希求尺度の作成の試み 日本パーソナリティ心理学会第19回大会 慶応義塾大学
2010年	9月	榎館尚武 アニメーション教育エージェントが示す遂行と非言語による理解度表出が学習者の自己効力感に及ぼす影響 日本教育工学会第26回 金城学院大学
2009年	9月	榎館尚武 教育用エージェントの理解度表出が学習者の自己効力感に及ぼす影響 日本教育工学会第25回大会 東京大学
2009年	9月	榎館尚武・佐藤彩華 身体化エージェントの発話をユーザの感覚と結びつける演出がそのインタラクションに及ぼす影響 日本応用心理学会第75回大会 横浜国立大学

受託研究・共同研究の実績	年 月 年 月 特になし 年 月
	大学院生指導 2022年度、修士課程1名の研究指導を行っている。 2020-21年度まで修士課程1名の研究指導を行った。
研究能力に対する評価	ASD児を対象とした共同研究および子どものためのコミュニケーションチェックリスト第2版を指標とした共同研究は順調に進展しており、論文としてまとめられるだけの情報が集まっている。上記の研究課題に関しては共著論文の作成・出版が進んだものの、ろう者を対象とした手話研究の成果報告が進んでいない。同様に、個人研究であるメディア教材を題材にした認知負荷理論の検討およびベタゴジカル・エージェントの効果測定に関する研究はデータの整理、追試による知見の確認が追いついていない状況にあり、自身の研究課題と共同研究とのバランスをとること、また各研究の成果を論文としてまとめる作業が追いついていないことが課題であると考えている。

サービス活動業績

	2022年 12月 授業課題ルーブリック評価ワーキンググループ 委員(2023年2月まで)
	2022年 4月 カリキュラム委員会 委員(2023年3月まで)
	2021年 4月 教務部運営会議 委員(現在に至る)
	2020年 4月 大学評価担当主任(2021年3月まで)
	2020年 3月 山梨英和大学新型コロナウイルス感染症対策本部実施員(2021年3月まで)
	2019年 4月 FD・SD推進委員会 委員長(2020年3月まで)
	2018年 4月 オープンラーニング科目連絡者(現在に至る)
	2017年 10月 公認心理師カリキュラム作成ワーキンググループ委員(2018年3月まで)
	2017年 4月 学部入学者選抜委員会 委員(2018年3月まで)
	2017年 4月 入試・広報部運営会議 委員(2023年3月まで)
	2016年 4月 山梨英和大学心理臨床センター紀要編集委員(2022年3月まで)
	2015年 6月 授業アンケート改訂ワーキンググループ委員(2015年12月まで)
	2015年 4月 教職課程運営会議 委員(2022年3月まで)
	2015年 4月 FD・SD推進委員会 委員(現在に至る)
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし

社会貢献活動	(1)講演会	2018年	12月	山梨県生涯学習推進センター 平成30年度生涯学習講座 「気持ちとストレスと健康」-上手に付き合うための基礎知識～
	(2)出前講座	2022年	4月	県立笛吹高等学校 『心理学の仕事』
		2022年	3月	県立甲府商業高等学校 『心理学の仕事』
		2021年	3月	県立富士河口湖高等学校 『心理学入門』
		2019年	3月	県立富士河口湖高等学校 『心理学入門』
		2018年	9月	県立吉田高等学校 楽問楽学講座
		2018年	3月	甲斐清和高等学校 『心理学入門』
		2016年	6月	山梨英和高等学校 『教育心理学のあれこれと最近の話題』
		2015年	6月	山梨英和高等学校 『教育心理学と最近の話題』
	(3)公開講座	2021年	6月	メイプルカレッジ 統計学を学ぶ その仮説は“正しい”と言えるのか？:統計的仮説検定
		2021年	5月	メイプルカレッジ 統計学を学ぶ データをまとめる:平均値と分散
		2019年	12月	山梨英和大学 12月進学相談会 チャレンジ特待生講座 数学
		2019年	5月	メイプルカレッジ 日常を豊かにする心理学:第1回 『検査を通じて学ぶ心理学のキホン～平均値と分散のはなし～』
		2018年	5月	メイプルカレッジ 日常を豊かにする心理学:第1回 『検査を通じて学ぶ心理学のキホン～平均値と分散のはなし～』
		2018年	6月	メイプルカレッジ 日常を豊かにする心理学:第1回 『こころの測り方 心理検査と簡単な統計の話』
		2017年	12月	メイプルカレッジ 量で紐解く臨床心理学 第2回
		2017年	10月	メイプルカレッジ 量で紐解く臨床心理学 第1回
		2014年	10月	県民コミュニティカレッジ サイコロジー・トゥデイ:第2回 『学ぶことの心理学:これまでとこれから』
	(4)学外審議会・委員会等	2018年	1月	日本発達心理学会ニューズレター委員会 委員(2020年1月まで)
		2009年	4月	日本社会事業大学GP 大学教育・学生支援推進事業[テーマA]大学教育教育プログラム 外部委員(2011年3月まで)
	(5)その他	2021年	12月	聴覚障害者の学び直し推進の会(一般社団法人視覚聴覚障害アドボカシー研究所) サポーター(現在に至る)
		2019年	12月	山梨県中央児童相談所での調査データの集計・分析の実施
		2018年	12月	山梨県中央児童相談所での調査データの集計・分析の実施
		2018年	9月	山梨ことぶき観学院 大学連携講座 講師 「社会心理学～状況に適應するひとの心～」
		2017年	12月	山梨県中央児童相談所での調査データの集計・分析の実施
		2015年	4月	山梨市教育委員会生涯学習課事業 山梨市生涯学習アンケートの作成・分析の実施(2016年3月まで)

成果と目標

専門的成果	<p>①論文執筆(語用検査によるASD者の分類について)にあたっての情報の整理を終えた。</p> <p>②発達障害児支援サービスの整理について学会発表を行なった。</p> <p>③子どもの語用能力評価法、標準化の準備を終えた。</p>
専門的目標	<p>①語用検査によるASD者の分類についての論文投稿およびその掲載。</p> <p>②新規CCC-2とASDの対応データを得るためのフィールドの確立およびこれらデータに機械学習や統計モデリングの手法を適用し、今後の研究のための知見を得る。</p> <p>③ろう者の英語教育の継時データの整理と成果の発表。</p>

作成基準日	2023年3月31日
-------	------------